ワーズワース「不死のオード」のオード的不整合

松　崎　慎　也

The Odic Unconformity in Wordsworth's "Immortality Ode"

Shinya MATSUZAKI

ワーズワースの「不死のオード」を、解消しがたい対立を孕んだままのテキストと考えるか、それとも、何らかの最終的な統合を見るものと考えるかは解釈が分かれる。前者の派であるライオネル・トリリングは、ワーズワースはこの詩を悲劇として仕上げることが出来なかったと考え、また、後者の派であるヘレン・ヴェンドラーは、この詩はエレジー的に展開しながら絶望の克服へと至っていると考えている。[1]

拙論は前者の立場をとる。ただし、貫徹しない悲劇というネガティブな見方をするのではなく、詩の内部における分裂を、オードという様式と相互連関する運動としてポジティブに捉えていく。「不死のオード」は、対立を統合解消するのではなく、対立を並列させたまま保持し、その緊張関係を、オードという様式の中で、効果的に表現している。

妹ドロシーの日記によれば、1802年3月27日にワーズワースは「あるオードの一部」を書き、6月17日に「執筆中のオードに少し書き足した。」[2] また、ワーズワースは、「不死のオード」についての自注で「最初の四つの連を書いてから、残りの部分を書くまでに、少なくとも二年は過ぎた」と言っている。[3] そして、コールリッジは1802年4月4日に、詩「――への手紙」を執筆し、これを、ドロシーの日記によれば4月21日に、ワーズワース兄妹に朗読して聞かせた (Dorothy 113)。コールリッジの「――への手紙」は、「不死のオード」第四連の問い、「幻視のきらめきはどこへ消えたのか／あの栄光と夢幻は今どこにあるのか」に対する回答の趣がある。[4] これらのことを併せて、ドロシーが記録した「あるオード」とは「不死のオード」を指すと推定され、3月27日の時点で、冒頭四つの連が執筆されたと考えられている。

この推定される史実に付随して、ワーズワースが提示した、「栄光」の喪失の問題に、コールリッジの方が先に決着を付けたという判断も下される。ただ、このようなやりとりがあったとしても、「栄光」の喪失という問題の中身は両詩人の間で微妙なズレを見せており、この問題は後で触れる。

1815年に付された副題の「幼少時の回想から」という語句が、詩は過去の出来事を述べているという印象を持たせるけれど、時制としては現在時制が支配的で、詩人が今抱き、巡らせている感情と思考――過去に関する現在の思考というのももちろんある――が全般的に述べられている。そのような中で、冒頭第一連は、過去時制で始まり、さらに現在完了形も使われながら、過去のことと、過去と現在の相違とが強調されている。外界が「天上の光を帯びて」(4) 見えたのは過去の話である。第一連の後、次に過去時制が現れるのは、第三連で、「私にだけ悲しい思いがやってきていた。／ある折りよい言葉がそんな思いに慰めをもたらした」(22-23) とあり、悲しみから抜け出したのも過去の話だとわかる。[5] 冒頭の四つの連においては、「天上の光」または「栄光」(17) が、もう直接感覚することのできない過去の視感であることと、詩人はすでにその喪失の悲しみから救われているということ、さらには、悲しみの克服は、「栄光」を直接感覚する力の回復を意味するのではないということ、この三点を認知しておくことが重要である。[6]

第三連後半からは、自然物と人間の子どもらの春の歓喜に対する詩人の共鳴が表現されていく。

ただ、その歓悦のトーンが第四連の最後で変化する。

聞こえてくる。私は嬉しく聞いている。
だが、眺めている多くの木々の中の
一本の木と一つの野原が
ともに、今はなきものについて話し出す。
足もとのパンジーも
同じ話をする。
幻視のきらめきはどこへ消えたのか
あの栄光と夢幻は今どこにあるのか、と。(50-57)

最後の二つの問いは、一瞬、悲しみへ逆戻りしたような印象を与えるけれども、そうではない。「だが」(51) という逆接に導かれ、述べられるのは、「一本」、「一つ」と直に対象を見つめるとき、「きらめき」、「栄光」が昔のように目に映ることはないということである。これは詩冒頭で述べた問題の再確認に当たる。悲しみの克服から歓喜への共感まで進んできた心理が、逆流を起こしているわけではない。第三連および四連の前半に述べられる、詩人の外界との共鳴は、第十連においても繰り返されるので、それが現段階における詩人の精神的境地であって、信用のおけないものとは考えにくい。ただ、ウビスント的な、最後の二つの疑問文に、哀調が感じられるのは確かで、このような下層流の挿入による二重の意識性も、この詩の特徴であり、このことは、後述する、オードという様式の特性と関連している。

最後の疑問文を、上の引用では、1807年初出時の形に従って訳出したのだが、1804年の手書き原稿では、「今どこにあるのか」の部分は、「どこへ消えたのか」となっていた。初出時において、「栄光」の今ある場所に対する意識が、より強まる形に変更されている。第三連の言葉を信用すれば、現段階で慰めはすでに得られている。そのとき第五連以降の目的は、慰めを希求することよりも、「栄光」が今どこにあるのか、その在りかを探ることと考えた方がよく、その第一の展開が、プラトン的な先在説の挿入なのであろう。

コールリッジの「――への手紙」中の最終第二十連に「栄光」への言及が見られる。

おお、セアラ、私たちは与えるもののみを受け取る。
そして私たちの生の中でのみ自然は生きている。
私たちの生が自然を包む花嫁衣装ともなれば経帷子ともなるのだ！
そして私たちは、より価値あるものを見つめよう、
哀れな、愛なき、常に満たされていない、群衆に
与えられた死んだ冷たい世界よりも。
ああ、魂自体から発するのだろう、
大地を包む
光と栄光と輝く雲とは。
また、魂自体から放たれるのだろう、
魂そのものを源とする甘美な力強い声、
あらゆる甘美な音の生命の元は。(295-306)[7]

「――への手紙」を書いたとき、コールリッジが知っていた、「不死のオード」の四つの連は、1804

年の手書き原稿の形の問いで終わっていたかもしれない。どちらの形の問いにせよ、コールリッジは、そこに詩人の嘆きの声を聞いたのだろう。上記引用の直後、「栄光」は「喜び」という感情に結びつけられる（314）。コールリッジは、その喪失を、詩人としての危機、詩的能力の衰えの問題と捉えて、その詩で「栄光」の在りかについて思索した。そして、上記引用のような、「栄光」の根源を主観に置く、観念論的な詩学にたどり着いた。

一方、ワーズワースは「栄光」の根源を神に置いた。

生まれ出ることは、眠りと忘却に過ぎない。
私たちとともに上った魂、私たちの命の星は、
どこか他の所に沈み、
そして遠くからやって来た。
完全に忘れたのでもなく
何も身にまとっていないというわけでもなく
栄光の雲をたなびかせて、やって来た
私たちの故郷である神のもとから。
幼いとき、天国はすぐ側にあるのだ。（58-66）

上のように、ワーズワースは、「栄光」の在りかの探究で、まず、プラトン的な魂の先在説を用いて、魂の歴史を遡る。魂は、原初の状態に近いほど、つまり、人間は幼いほど「栄光」と直に触れ、「やがて育ちゆく少年の上を／牢獄の影が覆い始める」（67-68）というように、成長とともに漸次、その光から遠ざかる。「栄光」の直感は、また、不死の感覚――幼児にとって墓は「人が待ちながら横たわる、思索の場」（123）にすぎない――という、幼児期の一つの心性とも重ねられる。ワーズワースにおいて、「栄光」の喪失は、人間の成長にともなう外界に対する認識の変化の問題となる。

このように見てくると、「不死のオード」は詩的能力の衰えに関する詩ではないという、トリリングの判断は正しいようにも思えるが、そうだろうか（Trilling 129）。「不死のオード」の中にも、コールリッジの観念論に似たものが、登場する。それは、第九連中の、ワーズワースが自注でも触れている（Fenwick 61）、幼少期にあった「感覚と外界へ／執拗に投げかける、あの疑問」（144-45）という心的態度である。

コールリッジの喜びの詩学はまた、『抒情民謡集』1802年版序文中の、ワーズワースが展開した詩人論に通じるところがある。ワーズワースは詩人について語りながら、「喜び」という言葉を何度も繰り返す。[8]「不死のオード」中の幼子への呼びかけ部分（108-25）は、コールリッジが『文学評伝』において、批判した箇所でもあるけれど、幼子を讃えるときの言葉――「魂の計り知れない大きさ」（109）、「具象化しない世界の中に」（148）――と、『抒情民謡集』序文で詩人について語るときの言葉――「広範な魂」、「見出さないところでは……創造する」（751）――には類似性が見られる。[9]

つまり「不死のオード」では、成長にともなう認識の変化と、詩的能力の衰えという、二種の主題が分裂しながらも重なり合っている。ワーズワースの考える詩人の資質とは、上で見たように、幼児的心性とも関わっている。成長による「広範な魂」の縮小は、詩的能力の一部を失う悲痛な出来事であり、「不死のオード」の冒頭は、万人がたどる成長の一段階というのとは異なる響きをもつ。ただし、それは能力の一部の喪失であった。他の部分は残り、「後に残るものの中に、力を見いだす」（182-83）ことで、悲しみは克服された。ここが、「栄光」の喪失という問題の中身を巡っての、コールリッジとワーズワースとの間の微妙なズレである。

今見た、別種の主題が重なる不整合や、先に見た感情面での二重性など、対立を統合解消せずに

並列させる、「不死のオード」内の緊張関係は、オードという様式の問題と関わっている。

スチュアート・カランによれば、イギリス文学の歴史の中で、オードという様式への伝統意識が確立したのは、18世紀後期に入ってからのことだという。[10] そして、ロマン主義期のオードは、オードという様式が文学的歴史を持ったとき、その歴史の重みに与って花開いたということだ (Curran 63)。イギリスでのオードの主要素と特徴を決定づけたのは、ベン・ジョンソンの「高貴な両人、ルーシャス・ケアリー卿とヘンリー・モリソン卿の永遠の名声と友情のために」とミルトンの「キリスト降誕の朝に」の二篇であり、「劇的で、内省的で、弁証法的」であることがイギリスのオードの慣習的な部分となった (Curran 64, 66)。

カランはまた、1790年代半ばには、ヨーロッパ全体が戦時下にあった影響もあり、対立関係が遍く広がり、懐疑主義が時代精神となって、ロマン主義期のオードの中の、弁証法的展開を促しているとして、詩の様式と時代との関連を指摘している (Curran 71, 84)。時代の混沌と文学様式の関連づけが許されるとしたら、ロマンティック・アイロニーという、この時期の時代精神についてのもう一つの呼び名をここで思い出しておいてもよいのだろう。

カランは「不死のオード」を、第一連から第四連、第五連から第九連、第十連と第十一連という三部に分け、そこにピンダロス風の三段構成、正反合の弁証法的展開を見、個人的喪失感（正）から喪失感の普遍化（反）、そして弁証法的対立を通じての自己発見（合）という流れを指摘し、この詩が、相矛盾し解消することない緊張関係を保持し、「結局、喜びと苦悩の両方を抱えながら」終わると論じている (Curran 78)。カランの記す、「不死のオード」の反統合的展開の指摘は、大いに参考になる。ただ、喜びと苦悩との、感情的な反復交替を、「不死のオード」の主要なパターンと考えている点は、この詩の展開を正確に捉えているとは言い難い。

「イギリスのオード様式に内在する矛盾」について解き明かす (Curran 71)、カランの議論によって示された、オード様式に対するパースペクティブを参考にしながら、「不死のオード」について論じていく上では注意も必要である。カランはもちろん、主要なオード作品のそれぞれにあたって、帰納的に、イギリスのオード様式の特徴を導き出している。そして、当たり前のことだが、そのような特徴は、扱われなかった他のオード作品のすべてに当てはまるわけではないだろう。カランが、ワーズワースを論じる箇所で取り上げている詩は、「ティンタン修道院」――資格が十分あるという理由で――と「義務へのオード」、そして「不死のオード」の三詩である。カランはそこで、各オード内の緊張関係を論じている。「不死のオード」以降にも、ワーズワースは、十篇以上のオード様式の詩を書いた。そして、先の三詩にあったのと同程度の緊張というものはそれらには見られない。また、緊張・対立は、もちろんオードに限った話ではなく、緊張・対立の中身にも、作品間、詩人間で相違がある。先にも触れた、『文学評伝』における、コールリッジの「不死のオード」に対する批判などを見ると、オード内で許される矛盾の程度について、共通の理解があったようには思われない。このように考えてくると、オードという様式は、矛盾を統合解消することなく表現できる機能を持ってはいるけれど、その機能が効果を現すのは、一つの時代と、一人の詩人がそのとき持つ創造的能力の両者が、相互に作用した結果だということを念頭に置く必要がある。

「不死のオード」には詩人による、間隔をあけての四度の呼びかけ部分があり、そこでは常に喜びが表現されている。主要な感情とは、この詩においては喜びであって、それに対する反価値的な苦悩が前面に出ることはない。先に、第四連に関して、歓喜の中の呼びかけの後に、喪失の再確認という、下層流が挿入される急転について触れた。同種の不整合は、第十連にも見られる。鳥と子羊への歓喜の呼びかけのすぐ後に、「かつてのまばゆい輝きは／永久にわが視界からは奪われている」(178-79) ことを再確認している。繰り返しなるが、ここでも指摘しておきたいのは、第十連にあるのも、喜びのさなか――「我らは悲しむことなく」(182)――に喪失をも見つめるという、意識

の二重性である。

「不死のオード」には、思想面に関する不整合も見られる。この詩は、詩人の省察と呼びかけで構成され、両要素が、オード的な転回（ターン）によって交替していく。省察の部分では、副題にもある不死の問題に触れている。ただ、不死については、三種の異なった方向性を持つ神話が説かれており、その三種が最終的に統合を見ることはない。[11]

不死の問題への言及は、第五連における、喪失した「栄光」の起源についての考察から始まっていた。そこにあるプラトン的な先在説は、ワーズワースの自注によれば、「詩人として」（つまり想像的に）、「最大限の利用」を試みたものだということだ（Fenwick 62）。

プラトンの先在説を、その著『パイドン』の例から見てみたい。

> 魂は人間の形の中に入る前にも、肉体から離れて存在していたのであり、知力を持っていたのだ。
>
> 魂が自分自身だけで考察する時には、魂は、かなたの世界へとすなわち、純粋で、永遠で、不死で、同じように有るものの方へと、赴くのである。[12]

並べてみると、ワーズワースもプラトンと同じように、魂は知力を持つものと考えており、また、魂の故郷として永遠の天界というものを考えている。

しかしながら、両者には相違点がある。プラトンにおいては、魂は誕生とともに失った知識を生後に再把握していく、すなわち、学ぶという方向へ向かう（パイドン 64）。つまり天界へと近づいていく。それに対し、ワーズワースにおいては、魂は生後、天界から漸次遠ざかっていく。また、プラトンに見られる、魂と肉体の対立的な二元論を、ワーズワースは話題にはしない。

「不死のオード」第六連へ進むと、魂が生後、天界から遠ざかる理由が示される。故郷を離れた魂は、地上という母によって、「知っていた栄光と／元来た王宮のことを忘れるよう」（83-84）手を尽くされる。ここでは、地上の「母性」（79）による育みが、「栄光」の忘却を促すというアンビヴァレンスが示されていると同時に、魂の神話は、プラトン的先在説から、もう一つの魂の歴史である、キリスト教的楽園喪失へと移っている。[13]

この別種の神話の交替劇に現れているオード的性格に関しては、ワーズワースの自注が説明を与えてくれる。異教的であるとの謗りを避けようと、先在は「不死についての直感における、一つの要素以上のもの」ではなく、「薄弱な観念」であるとしつつも、「聖書中には先在説を否定するものはなく、また、それに沿うような類似性を、人類の堕落は物語っている」と、ワーズワースは述べている（Fenwick 61）。そして、その後すぐに、アルキメデスの有名な言葉「われに支点を与えよ」を持ち出すのは、論として自分がかなりの無理をしているということを認めているからだ（Fenwick 61-62）。二種の対立する信条を、「詩人として」（この場合は、オード様式の中で思索する詩人として）並列させている。

作品全体にちりばめられた、「神」、「天国」、「祝福」（35，65，66，114，128，137，138）などの言葉も、第二の方向性であるキリスト教的信仰を伝えるものである。また、幼子にとって墓は、「人が待ちながら横たわる、思索の場」（123）にすぎないという思考も、復活を待つ死者という、キリスト教的信仰と重なる。このような宗教的方向性を持つにもかかわらず、不死を扱う上で、キリスト教における不死の教理に本質的に関わるイエス・キリストについて触れられることはない。

このオードにおける、不滅を巡る思索において、ここまで見た、哲学的なものと、神学的なもの以外の第三の神話が第九連に登場する。

穏やかな季節にあって
遠く内陸にあろうと
私たちの魂は眺める、不滅の海を、
それが私たちをここへと運んだのだ。
そして、一瞬にしてそこへと旅し、
その浜辺で子どもらの遊ぶのを見、
その力強い波が永遠にうねるのを聞くことができる。(164-70)

ワーズワースがこの「不滅の海」(166) を描くのに、拠って立っているものは何であろうか。万物の原理を水と考える、タレースの説であろうか。

デズモンド・キング＝ヘレは上記引用箇所に、生命の起源を海に見る、エラズマス・ダーウィンの進化論の影響が窺えるとしている。[14] ただし、キング＝ヘレも、この魅力的な見解に関して、有力な根拠を示しているわけではなく、ワーズワースの詩句にダーウィン的響きを聞いているのみである。そして、異教的という謗りを嫌うワーズワースにとって、生命の起源は「神」(65) であるというのが、「不死のオード」における言葉遣いである。

ハロルド・ブルームは、「不死についての最重要の暗示が、子どもたちと不滅の海についての、この詩の隠喩的ヴィジョンである」と述べている。[15]「不滅のオード」の詩人は、「栄光」を直接感覚する力は失ったものの、「人間の苦悩から／生じる、慰めの思考」(186-87) から、このようなイメージを紡ぎ出す。これが、冒頭にある、慰めを得ているということの理由でもある。

ブルームは、この第三の神話に最重要という評価を与えているが、それは、ブルームの評価であって、ワーズワースの評価も同じなのかどうかはわからない。ワーズワースはこれらの三種を順に並べてきたのであって、順次、前者に後者が取って代わるように発展させたのではない。仮に、第三の神話を科学的なものとして、三種の神話を、ここで便宜的に、哲学、神学、科学と呼びたい。これらは、重なる部分もあるだろうが、それぞれ体系上、相容れない別種のものである。

自注に戻れば、「人間の中に十分に根差している」なら、「自らの目的のために、詩人としてできる最大限の利用」は認められるとするのが、ワーズワースの創作理論である。ゆえに、哲学、神学、科学の並列は、「栄光」の在りかを探るために、詩人がそれぞれを最大限利用した結果であると考えられる。カランは、「不死のオード」を論じながら、

人間の生に本来的で、普遍的で、解決や上辺だけの総合にも抵抗する、矛盾の間の緊張は、どのような優れた形式にも消し去られることはない。(Curran 78)

と記す。「不死のオード」では、オードという様式の中で、対立するものの並列的不整合という、人間的とも言える精神が表現されている。

注

1　Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (1950 ; New York : New York Review Books, 2008) 129-59 (以下、Trilling) ; Helen Vendler, "Lionel Trilling and the Immortality Ode," 1978, *The Music of What Happens : Poems, Poets, Critics* (Cambridge, Mass. : Harvard UP, 1988) 93-114.

2　Dorothy Wordsworth, *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed. Mary Moorman, 2 nd ed. (1971 ; Oxford : Oxford UP, 1981) 106, 137 (以下、Dorothy).

3　William Wordsworth, *The Fenwick Notes of William Wordsworth*, ed. Jared Curtis (London :

Bristol Classical P, 1993）61（以下、Fenwick）.

4　William Wordsworth, *Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807*, ed. Jared Curtis (1983 ; Ithaca and London : Cornell UP, 1990).「不死のオード」の引用は、手書き原稿も含め、すべてこの版による。

5　「ある折りよい言葉」は、詩「虹」を指すというのが通説であるけれど、トリリングが代替案を提示しているように、論証は難しい。この詩だけからすると、「人間の苦悩から／生じる、慰めの思考」（186-87）の一つであるとしか言いようがない。

6　挙げた三点のどれかが、「不死のオード」を巡る議論において、意識されていない場合があるように思われる。一例として、次のものを挙げる。Paul Magnuson, "The Genesis of Wordsworth's 'Ode'," *The Wordsworth Circle* 12 : 1（1981）24. ここで、ポール・マグヌスンは、1802年の四つの連を1804年の残りの連と切り離して考察し、「1804年の詩行は喪失に対する慰めを提示している」と述べ、第二の点、1802年の連にすでにある「慰め」には意識を向けていない。

7　Samuel Taylor Coleridge, *Selected Poetry*, ed. H. J. Jackson, The World's Classics (Oxford : Oxford UP, 1997).「――への手紙」の引用は、すべてこの版による。

8　William Wordsworth, *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*, ed. James Butler and Karen Green (Ithaca and London : Cornell UP, 1992) 751.『抒情民謡集』1802年版序文の引用は、すべてこの版による。

9　Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literatia*, ed. J. Shawcross, vol. 2 (London : Oxford UP, 1907) 111-14.

10　Stuart Curran, *Poetic Form and British Romanticism* (Oxford : Oxford UP, 1986) 63（以下、Curran).

11　トリリングは「限られた意味においてのみ、このオードは不死についての詩である」と記す（Trilling 132)。トリリングも触れている、コールリッジのような細部が気になる神経の持ち主にとっては（Trilling 133)、『文学評伝』で指摘されたような「不死のオード」の不合理な部分は意味をなさない。不死を巡る三種の神話の緊張関係を見出すには、矛盾の統合解消を積極的に断念する読み方が必要とされている。

12　プラトン『パイドン』岩田靖夫訳、岩波文庫（東京：岩波書店、1998）66, 76（以下、パイドン).

13　「不死のオード」を、楽園喪失からの救済を描くものと解釈し、キリスト教的信仰を読み取る批評に関しては、次のものが挙げられる。George W. Meyer, "A Note on the Sources and Symbolism of the Intimations Ode," *Tulane Studies in English* 3 (1952) 33-45 ; Thomas M. Raysor, "The Themes of Immortality and Natural Piety in Wordsworth's Immortality Ode," *PMLA* 69 (1954) : 861-75.

14　Desmond King-Hele, *Erasmus Darwin and the Romantic Poets* (London : Macmillan, 1986) 82.

15　Harold Bloom, *A Map of Misreading* (New York : Oxford UP, 1975) 146.